

家庭科の男女共修をすすめる会

ニ
ュ
ー
ス
No
4

※発行日 75. 1. 25

※連絡先

東京都渋谷区代々木2-21-11

一部 50円

婦選会館内

TEL 03-370-0238

もくじ

- ◎第五回「家庭科の男女共修をすすめる会」集会報告——テーマ——男女の特性と家庭科……………
- ◎京都府立高校の共修家庭科参観の記……………
- ◎教課審会長高村象平さんをお訪ねして……………

- ◎地方では……………家庭科の男女共修をめぐって……………
- ◎教育課程審議会委員 益井重夫氏訪問……………
- ◎文化祭、教研集会に参加して……………
- ◎日記メモ……………

昭和五十年を迎えて

あけましておめでとうございます。
家庭科の男女共修をすすめる運動も二年目を迎えました。

教育課程審議会の答申も今年の暮に予定されていますので、私たちも更に力をこめて運動をすすめたいと思います。

関係方面との話し合い、一般の人々へのよびかけに更に力を入れた上、あるべき家庭科の内容についても考えていくつもりです。

教科内容は現場で決めるべきものですが、会々としても、これまでに実施されている共修の家庭科の内容や、あるべき内容についてのいろいろな意見を小冊子にまとめて、参考に使いたいと思います。

母親や学生等による家庭科教科書研究グループ

ープをつくることも考えています。

集会でも、二月には家庭科教科書の問題点をとり上げ、次の回では、家庭や婦人の問題が教科書でどう扱われているか他教科も含めて考え、更に次には、憲法、教育基本法と「女だけの家庭科」の関係をテーマにする予定です。

教科書研究グループに参加できる方、教科内容についてご意見がおりの方は、どうぞ事務局にご連絡ください。

なお、ニュースNo.3でもお願いしましたように、刊行物、集会等の紹介、パンフレットの配布、労力の提供、カンパなど、今後ぜひよりしく願います。

(発起人一同)

「男女の特性と家庭科」

人間の発達のあるかたを考える上

社会学)

ある。父親が意味を持った存在として登場して来る頃、母親と子だった関係に父親が現わ

れると同時に対応としての母親の存在もはつきりしてくる。そこで、母親と父親という女性と男性の関係が子どもに理解されるようになる。

位置づけともなり性別の問題も含まれてくるから、そこに男らしさと女らしさが出てくる。

(母親) 表出的 (娘)

父親は男のサンプルとして、母親は女の	優	劣
--------------------	---	---

どもは具体的な日常
 会話のなかから学んで
 (父親)
 手段的
 (息子)

(父親)
手段的
(息子)

優	(親)
劣	(子)

くれる女性を求めるようになる。

結果として、男性はいつまでも子どものままであり、女性はいつまでも母親的である。妻である女性は夫である男性のわがままを許して

ある女性は夫である男性のわがままを許して

•

第3期
(昭和30)

わが国が経済立国を目指して本格的な始動開始、こゝで第二の産業の合理化、労働力の再編成が行われる。大量の女子労働者がふたゝ

れたのは、①若い ②短かい ③安いの三つであった。若年定年制や結婚退職制もこの頃問題になった。

第4期 安保以後（昭35）
經濟急成長期、家庭は消費市場として經濟を

支えた。安保以降、マイホームが定着してくるが、これは体制の安全弁であると同時にあとからあとと作られる電器製品、マイカー、乏生つき効外住宅の消費の担い手としての家庭であった。こゝでは消費は美德がスローガンになっていく。一方、マイホーム主義を賛

美し続けた結果、産業社会にとって困った面もでてきた。それは男の中にもマイホーム主義が浸透し出したことである。男性の女性化論争が話題をよんだ。

第5期 貿易自由化時代（昭40～）
男は仕事、女は家庭が定着へ——男は猛烈社

男は仕事、女は家庭が定着へ――男は猛烈社

員として海外へ雄飛し、女は家庭を「城」としてまもる。男にとつての家庭は「航空母艦」のようなものである。

② マイホームイデオロギー

：以上のような背景をふまえ、マイホーム、イデオロギーの内容をさぐれば、家庭の経済責任者としての夫と家事責任者としての妻とのはっきりした役割分業論に帰結する。家事労働というのは資本にとってはコストを下げる無償の仕事としての位置づけをもち、資本の側はこれを間接に利用してきた。資本は労働者をはじめから「男子」と「女子」のこれに分けてきた。男子労働者は家計責任者として、したがって企業への忠誠を誓わせ、女子労働者は家計補助者として雇ってきた。したがって若い時は未熟練労働者として、後年はパートとして使う。こゝで産業社会における「家庭の役割」について云えば①人的資源再生産の場としての家庭 ②未来の労働力を育てる ③消費市場としての家庭 ④体制の安全弁としての家庭である。

以上のような産業社会の基本路線にそつて教育、ジャーナリズムが見事に動員され強化されていく。教育、ジャーナリズムで騒がれていることは産業社会そのものの要求に他ならない。

らない。

一方、マイホームイデオロギーの底部には日本の伝統的な母性尊重文化があるような気がする。例えば田中前首相が辞任を決意したとき、新潟の母親に電話し、母親は「いつても帰っておいで」と云った、それに対し田中氏は「やっぱり母は母だ」と述懐したとマスコミは報じる。三木首相のエピソードといえば奥さんに関するものばかり……最後につきくずせないのは母性であるというように、男のセンチメントから発する、甘えの中核に母親がある。一方、母親はその現実に甘え、生き甲斐としての息子に傾倒する。

家庭科の男女共修は母性の比重がかなり大きいのではないかと思われる。

③ 現状をいかにのり超えるか
性による役割分業論は現実にはどう機能しているか、主婦の労働力化は分業では働かないタマエの主婦が働いている。しかも働いても主婦の解放とは無関係、その証拠に家事は一人で背負っている。

一方、女子のライフ・サイクル説がある。女子の平均寿命が七十才、子育ては三十五才で一応終るとして残りの四十年間、女はどうやって生きていくか、中年以降の母親の空白

をどう埋めるかが母親たちの大きな問題意識となりつゝある。夫婦の断絶、親子の断絶、こゝに専業主婦のイライラの根がある。

そこで自分も含めた女性の生き方について再考が必要であろう。

「母性を持っている」というだけでは労働市場においてはデメリットでしかない。一方エリート女性になろうとすれば母性を捨て、男なみの労働を強いられる。女子教育も労働市場に対応して歪みをもって臨んできた。マンパワー機構の戦列にあつてマイホームのまもり手としての育成にあたってきたのである。一人では生活できない生活不可能の男性予備軍と、経済的自立不可能の女性予備軍を生産してきた。多くの主婦層は今や家庭生活の矛盾に気がついている。自分たちの自由はタコソポの自由だという。それではどうするか。性別分業論を打破する論理を構築しなくてはならない。それには現在の矛盾と壁を再点検し、現在の価値観をひっくり返して考えることが必要である。例えば家庭を産業中心から人間中心に考えるという方向もあるだろう。人間のための家庭、自分たちの家庭、女には親でなく、男には安息所ではない自由の拠点として家庭を考えることである。

また性別役割分業で男性側の被害を教えることも一方法であろう。

家庭科の男女共修問題も、家庭生活の変革を担っていく家庭科として位置づけるべきだと私は思う……という趣旨であつた。

(文責・嶋田)

ついでつぎのような質疑応答がかわされた。

△質問▽ 男女の特性と社会との関係をどうとらえるか。

どんな社会においても、男はこうあるものだ、女はこうあるものだということは、本当はわからないのではないか。だから、なかなか女とはどういうものか、男とはどういうものであるかがわかってこない。そんな時、母親の存在が重要視されてくる。母親は自分の息子を女性にたよらない男性にそだててゆかなければならない。

△質問▽ 男女には特性があると思うか。それと社会・家庭とどうかゝわるのか。

社会や文化によつて違うからどうともいえない。唯、役割りの分化のようなものはあつて、年令、職業などによつて違つてくるとは

思うが、それ(役割り分化)を、性別で固定する必要はまったくないと思う。女性の子どをもを生きることが出来るが、そのこと以外にはまったく違わないと思う。生まれた子どもに対する拘わり方では男性も当然拘わるべきだし、そのような社会的な配慮が必要なのである。

それから、子供は両親の姿をなぞつて成長してゆくけれども、ひとつの家庭で実行しただけではしかたがない。男性の価値感も問われてくる。人間として自由に生きるといふ民主的な家庭を作る必要もある。男女の枠をとっぱらえば(個人)としての差が出てくるだけなのだから、男性は自分が良い仕事をしようと思つたら自立した女性と生活を共にする必要があると思うし、多くの家庭がそうあらねばならない。現実として大変に困難ではあるが――。

このあと討論に入り、「性にかゝらず好きな生き方が出来る社会が望ましい。全部こりすべきというのではなく、自由な選択により人生が選べる社会が必要」という意見が出た。それに対して、「自由な選択が可能なら階層はほんのひとりにすぎない。その考え

は生活のための職業と家事を一身に背負っている多くの主婦を固定化する恐れもあるのでないか。男性も職業か家庭かを選択するのでなく、男女ともに職業も家庭もできる社会にするためには家庭科の男女共修は必要なのではないか」「家庭科の男女共修のためにはまず、男女共学がたてまえのみならず実質的にも行われる必要があるのではないか」「市民運動のサイドに立った家庭科の教科書点検の必要」などなど活発で真剣な意見が交換され、四時半すぎ閉会となった。

つぎの集會のおしらせ

テーマ 「家庭科の教科書を検討する」
日時 二月一日(土) 午後一時半
～四時半
場所 婦選会館 渋谷区代々木二丁目二一
講師 伊藤文子(家永教科書訴訟を支援する会 練馬事務局長)
会費 二〇〇円(含む資料代)
お父さん、お母さん、高校生大歓迎

..... "京都府立高校の共修家庭科参観の記"

▲学校の沿革▼

授業を参観した京都府立桂高校は、京都市街地の外れ、右京区川島松ノ木町に所在する戦後にできた高校ですが、設置当時、農学校であったところから、大きな農場や温室などの設備もある田園情緒ゆたかな高校です。京都の府立高校が東京の都立高校と、決定的にちがう点は、同一校内に普通科と職業科が併置されている点ですが、桂高校の場合も、普通科7学級に農業科、園芸科、家政科がそれぞれ1学級ずつ計3学級併置されて、これらを混合したミックスホームルームで学年10クラスが編成されています。在籍生徒の男女別をみますと、農業科と園芸科はほとんど男子、家政科は女子、普通科は6・4位で男子が多いため総員では、男子七〇五名、女子五八七名という大規模高校です。

生徒の進路状況をみますと、就職者は約5%で大多数が進学希望になっています。

▲教育課程▼

男女共修の家庭一般は、各課程の二年生に2単位おかれ、選択科目は普通科3年に5単位、家庭科以外には設置されていません。

共修家庭科の内容は、京都府家庭科研究会のカリキュラムに準拠していますが、教科書は「中教」の「家庭一般」と「家庭経営」の二冊を持たせている（単位認定の関係上）ということでした。

▲授業▼

参観したのはG・Aの二講座でGは男子15名女子25名、Aは男女半々で約35名の学級でしたが、教室の雰囲気は服装にも態度にも性差は全くといってよいほど見あたらず、いたって安定したあたり前の授業風景でした。

単元は「家族と職業」で、現在日本の労働観、職業意識がどのようななかで育成、管理されているか、雇用制度、賃金制度の日本の状況、搾取のしくみなどが教えられ、生徒たちの進学意図や学歴観も、問題としてとり上げられていました。

生徒たちの大半は、男女ともに（男か女かもつまびらかでない生徒も少なくありませんが）一応まじめに授業に参加していましたから、他教科の授業と特にちがった点はほとんど目につかず、校内で映写された「はだかの十九才」が話題にのぼった時など、全員が強い関心を示したのが印象に残った位でした。

▲あとがき▼

職業科の授業は、普通科よりはるかに熱心にすすめられるという事でしたが、時間の都合でみることができず残念でした。しかし「男女共修」は生徒たちにとっても何ら特記すべきことではない事実を改めて確認したことでした。この当然のことが、当然のこととして肯定されるためになぜエネルギーが必要なのかと、改めてこの歴史的状況を反響しないではいられなかったわけです。

その他の会合のこと

そのほか、10、11月中には、たくさん教育関係の集会がもたれ、そのなかで「共修もんだい」がとり上げられました。集会を日程順にあげてみますと、10月12日、11月21日の二回にわたって京都府立高校家庭科研究会（半官半民のもの）10月19日は都立高校教組教研家庭科分科会、10月26日は都立高校教組婦人部総会、11月29日には多摩教育を語る会、11月15・16日には都立教連教研集家庭科分科会などですが、婦人部総会では今年の活動方針として「共修を研究すること」「学級定員を35名とすること」がきまり、その他の集会では、主として「共修家庭科の教育内容をどうするか」が協議されました。

（文責 和田典子）

教課審会長

高村象平さんをお訪ねして

十二月十五日の日曜日、発起人五名は、教育課程審議会会長高村象平さんを、茅ヶ崎の自宅にお訪ねしました。

今の受験中心の教育、つめこみ主義の教育を続けるなら、若者はますますだめになり、世の中は住みにくくなるばかりだということでは、意見は完全に一致。もっと生活をたいせつにする人間を育てるように教育をすべきだということも、基本的には認めていたと聞きました。

けれども、中学、高校の家庭科の男女共修という点になると、やや微妙になって来るのです。私たちの主張には十分耳を傾けていただけに、うなづきかけ方が必要だと感じました。「高校の男の子に縫い物などをさせるにはどうも……」と、「男女の特性」にはやはりこだわっていらっしゃるようでしたが、「教育上男女の違いを配慮することは必要だとしても、制度的に男女をはっきり分けてしま

ことはない」ということはほぼ認めてくださったように思います。

市民運動体である「会」としては、教科内容の具体案をつくることまでは必要ないとしても、男女共修の家庭科のイメージをもう少し明確にするための資料を早くつくらなければと思います。

審議の内容は公開できないとのことでしたが、大体の予定は伺うことができました。審議会はこれから小、中、高の部会に分れ、今までの委員に新しく任命される専門委員が加わって、各地の現場からの声も集めながら審議がすすめられるとのこと。答申の予定は十二月だそうです。

「今度改革ができなくても、気長にやってください」ともおっしゃいましたが、「受験中心の教育を根本から変えるのは大変だけれど、家庭科の共修位はすぐできることですからよろしく願います」と、更に資料などをお送りする約束をしてお別れしました。

これで直接お話をできた審議会委員の方は七名、やっと三分の一になりました。もう少しがんばらなければと思っています。

（梶谷）

地方では……

家庭科の男女共修をめぐる

講演などでよく地方へ参りますので、なるべく家庭科の問題についても話し合うように努めています。各地方でも男女共修に向う動きは少しずつ出て来ていることが感じられます。

茨城県下館二高の家庭クラブ主催の講演会（十二月十三日）には、六人の家庭科の先生が出席されましたが、「会」ができたことは、ひとつの指針となって勇気づけられるという発言がありました。

福山の地評婦人部結成準備大会（十二月十日）でも、家庭科の男女共修のことが話題になりました。会の前に家庭科の先生が集って話し合いもされたそうです。「家庭科が男女共修になってしまったら、女子に必要な家事技術はどこで教えるのか」という質問が出るなど、共修についての理解はまだ十分とはいえないようですが、この問題についての関心はかなり高まっていることが感じられました。

（樋口）

教育課程審議会委員 益井重夫氏訪問

十一月二十九日、和田・半田は、国立教育研究所第二研究部長で、教課審委員の益井重夫氏を訪問した。氏の専門は比較教育学で、「専門外のことだからぜひ話を聞いて勉強したい」と言われていただけに、前以てお送りした会のニュースや「一問一答」のパンフによく目を通しておられた。

・家庭科教育は、家庭教育でなすべきことを学校が肩代わりしようとする性格のものとはいえないか
・戦後の不十分な女子教育が、今日の無責任な若い母親を生んでいるのではないか
・男女共修の家庭科を望む場合、技術を取り入れるとやりにくくなる。男子にそこまでさせる必要があるのか、女子がその程度の技術しか持たなくても良いのか、という抵抗が必ず出るだろう。現在の小学校の家庭科のレベルに少し上積みする程度でよい、ということになると不要論が出るだろう。
・日本の教育は伝統的に技術教育に弱く、これをきちんと教育の中に位置づける必要がある。

性はわかるし、男女とも、かなり多様な中身を学ぶような総合的学習形態の必要性も感じている。

・家庭科は、技術を通すところに教科としての独自性を持つのだろうが、技術をどの程度入れるかが大問題で、当然圧縮せねばならない。

・中・高校における男女共修の家庭科として、週何時間を考えているのか。技術・家庭科を技術科と家庭科に分離させよ、という論に対してはどう思うか。

以上の質問や意見の後、
・家庭生活のあり方を建て直さなければ、日本の将来は憂うべきことになる。家庭のことを考えるのは男女の特性にかかわらず大切だという趣旨には賛成する。しかし、教育内容の精選が教課審の一大課題となっている時、最少限とだけの内容を男女共に学ばせるべきだ、という具体的なものが出ていないと、審議会で取り上げることが難しい。

・社会科でも「家族」を教えるが、うまくいかない。これは今の社会科が悪いのか、社会科で扱うことが本質的にふさわしくないのか。「家族」を取り上げる時、社会科と家庭科ではどう違うか、というような点を明確にしてほしい。

・今の指導要領の修正というより、なにかから手をつけて、内容を精選、削除あるいはつけ加え、男子に学ばせても無駄でないというものを作り上げれば、審議会でも有力な参考資料になるだろう。

・五十年に答申を出すのが目標だが、作業は難航している。今の時代では絶えず部分的な教育課程の修正が必要だ。たとえ次の答申に家庭科の男女共修が盛り込まなくても決して絶望するな。

☆ 日本家庭科教育学会例会から

十一月三十日、文化女子大学で開かれたみだしの会で「男子の家庭科履修を考える」というシンポジウムがあった。司会は埼玉大学丹野郁氏、講演者は、埼玉大学名誉教授桑原次氏、十文字短期大学原田一氏、都立文京高

等学校宮川志づ子、東京学芸大付属世田谷中学校加藤とみえの四氏。

桑原氏は「家庭科教育学会が、女子の家庭科履修とは別に『男子の家庭科履修を考える』という立場でこのテーマを取り上げたなら、テーマそのものが家庭科についての問題点を示すものだ。家庭科の性格も中身も先天的に決っていて、それを男子にも履修させるといふ『学習のしかた・形式』の問題ではなく、『家庭科とは何か』という本質の問題でなければならぬ」と前置きして、次のように語られた。

「戦前の家族制度を重視し、家庭生活を重視し、女子だから家事・裁縫を学ばねばならぬ、という考え方を否定したところに誕生したのが家庭科である。家庭科は国社教理などと少しも変わらぬ普通教科であって、女子専科ではない。『男子も下宿生活や単身赴任で困らないように』というより、単に実用主義ではなく、『人間として家庭生活がいかに大切か』というヒューマニズムが根底になければならない。家族制度を否定し、男女の人間としての平等を根幹とした憲法・教育基本法の精神にのっとり、家庭科は男女共修でなければならぬ」。

文京高校は、昭和四十六年度から、家庭一般のうち二単位を一年で「生活科」として男女共修。二年は家庭一般として女子二単位必修、三年には選択科目として被服・食物をおき、男子も食物を選択している。宮川氏は、生活科のねらいと内容を新入生に配る印刷物によって語られ、会員の質問も相次ぎ関心を集めた。特に次の発言は興味深かった。

「生徒には、ことさらに意識する問題点はない。一学期末には感想を記させて四年になるが、『今まで何となく見過ごしてきたことに、今関心を持つようになった』。他の教科では学べないこと——人生を考えるようになった」「新聞をよく読むようになり、親子の語らいがふえた」などと書いている。父母からの異議申し立ては何もない。教科書購入の日に「息子が家庭一般の教科書を買ってきたが間違っているのか」という電話があった程度。子供の話を聞いて関心を持ったので、と授業参観をした人が四人あり、いずれも面白かった、と述べて帰った。」

東京学芸大付属世田谷中学校では、どうして技術・家庭科を男女別に教えねばならないのか、という素朴な疑問から出発。検討の末、学校独自で内容を組み替え、男女別学・共学

二本建ての授業を行って三年になる。二週間単位、二時間続きの時間割なので、共学の授業は二週間に一回行われる。男女の教師が受持ち、学校としてやりやすい形を工夫した。共学の授業内容は、女教師が、食・衣・家族関係・保育・家庭経営を、男教師が住居関係や電気、園芸を教える。授業は、プリントを進めているが、考えたことを実験し、話し合い、まとめ、発展させて何か作るといふ形態をとるので、子供達は興味を持っていて。感想を問うと、二年では、てらいから「男子は家庭を学ぶ必要がない」との発言があるが、三年では、素直に学習の必要性を認めているとのことであった。

原田氏は「家庭科は家庭生活の学習をする教科であるが、男女には各々特質があり、男は職業、女は家庭というのが筋道である。男子が家庭科を全然学ばないのは問題だが、家庭生活に関しては他教科でも学ぶので、家庭科でなければ教えられないことという技能が中心になる。従って男女が家庭科を学ぶ場が中心になる。従って男女が家庭科を学ぶ場合、内容・時間には差があるべきだ」と述べ、私は氏の考え方の問題を指摘した。

同氏は「各地の男子の家庭科履修の実績の上に立って指導要領が改訂されるべきで、ま

だ実績の乏しい現在、政治的な運動で指導要
領を変えさせようとするのは妥当でない」と、
暗に「男女共修をすすめる会」を批判したが、
桑原氏が最後に人間尊重の立場から「人間で
ある限り、男女の別なく教育の場を与えるこ
とが、教育を受ける権利を保障することにな
る」と結ばれたのが力強かった。(半田)

文化祭、 教研集会等に参加して

『考える高校生』十二月号は、高校の文化

祭の中で取扱われた政治的、社会的テーマに
ついて特集している。一〇〇名の返答の中で
「文化祭で政治的、社会的テーマを扱った」
と答えているのが半数であった。多い順から
あげると、「公害、自然破壊をめぐる問題」
二十件、「狭山事件」と被差別部落問題十九件、
教育問題十五件、戦争、原爆、自衛隊等の問
題十二件、朝鮮問題六件、女子の家庭科必修
共学問題五件、社会福祉問題四件、(以下省
略)となっている。

文化祭の行われた十、十一月、会の方から
は三つの大学の文化祭に出掛けて、アビール
をしたり、ニュース、パンフ等の販売をした
が、出来たら、五十年度け高校の文化祭でも
この運動を紹介していきたいと思っている。
日本女子大では、「女子労働を考える」のシ
ンポジウムで、日本では「女性解放」シンポ

ジウムで、お茶大では、「刑法改正を考える」
シンポジウムに参加して、運動の紹介等をし
たが、どの会でも話は多方面にわたり、また、
参加者一人一人が、女性解放のためにどんな
運動をするかという切実感には、やや遠い感
じで、まあ、運動の紹介が出来たという程度
であった。大学生は、直接「女子の家庭科必
修」という問題にはぶつからないが、大学の
中で「女性史講座」、「婦人問題講座」を開
かせる運動がもっと活発になってくれば、こ
の運動とも、もっと手が結べるのではないか
と思う。

十一月三十日は、九段会館の「刑法、やっ
ちやうフェスティバル」でも、ビラまき、店
びらきをしたが、パンフレットや、ニュース
がとぶようにうれたという訳にはいかなか
った。今後でもできるだけ、多くの人の集まると
ころには参加して宣伝につとめたい。

しかし、ニュースやパンフレットが、参加
者のほとんどすべての関心を呼び、よく売れ
たという会もあるのである。十一月十六日、
十七日に埼玉県教組、及び高校組合同の教研
集会が開かれ、その「家庭科分科会」に参
加した。この会では、半日をかけて、「家庭
科の男女共修」をめぐる話し合われた。参加
した、約二〇名程の小中高の教師は、「男女
共修」には異議はないが、どうしたら実現で
きるか、その素地を作るためにはという話が
中心となった。(中嶋)

日誌メモ

- ★10・1 「新しい地平」№5「教育改革は
家庭科から」(中嶋)
- ★10・18夜 発起人会
- ★11・1 発行 「情況」良妻賢母主義教育批
判—家庭科の男女共修を(落合)
- ★11・2 ニュース№3 発送
- ★11・3 日本女子大大学祭「女子労働を考
える」シンポジウム
- ★11・19 発起人会、集案内発送 (中嶋)
- ★11・23 日大大学祭「女性解放」シンポジ
ウムでアビール(佐藤・坂本)
- ★11・29 益井重夫(教課審委員)訪問
(和田・半田)
- ★11・30 日本家庭教育会例会「男子の家庭
科履修を考える」(半田)
- ★ 〃 「刑法やちやうフェスティバル」
でビラまき、一問一答、ニュース
販売(中嶋・落合)
- ★12・7 第五回集会 家庭科の男女共修を
すすめる会—男女の特性と家庭
科—
- ★12・17 高村象平教課審会長を茅ヶ崎のお
宅に訪問(梶谷・駒野・中嶋
半田・和田)
- ★12・20 婦民新聞に中嶋インタビューけ
る (塚本)